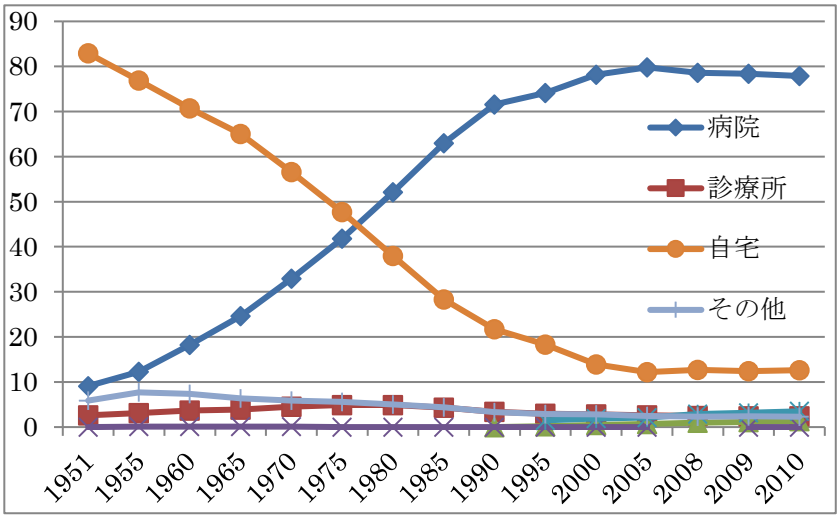
「終の棲家（ついすみか）」 ― 在宅での看取り ―

皆さんは、ご自分の最期の時をどこで迎えたいか考えたことがあるでしょうか？世の中にはさまざまな不平等がありますが、この世に生まれてきた以上、どんなに幸運に恵まれた人でも、「最期の時」は必ず訪れます。今回は在宅での看取りについて、考えてみたいと思います。

下のグラフをご覧ください。実は日本では、1970 年代半ばまでは、病院死より在宅死の方が多かったのです。意外と最近まで在宅死が多かったとは思いませんか？ご高齢の方の中には、ご自宅で家族を看取った経験がおありの方も少なくないと思います。一方、最近では核家族が進み、また、共働きの世帯が増加し、家庭の介護力はかなり低下してきています。さらに、家庭で病人と共に生活する経験の不足から、強い不安感を抱きながら生活しなければいけないご家族のストレスや、家族の手を煩わせたくないという患者さんご本人の遠慮などから、在宅での看取りがますます難しくなってきております。しかし患者さんご本人は、できれば住み慣れた自宅で、家族に囲まれて最期を迎えたいとお考えの方も少なくありません。



ではこのような環境の中、ご自宅で不安なく、またご家族への負担もできるだけ少なく過ごせる方法はないのでしょうか？実は緩和チームは、このような在宅での看取りの環境を整えるお手伝いをするのも、大きな仕事の一つなのです。

桐生地域には、在宅医療や看取りに熱心に取り組まれている診療所の先生や、訪問看護ステーション、ケアマネージャーの皆さんがいらっしゃいます。

緩和チームは、当院の地域医療連携室を通じて、このような地域の皆さんと密接に連携をとり、患者さんができるだけ快適に、不安なく在宅でお過ごしいただけるよう、環境を整えて行きたいと考えております。すべての患者さんが、在宅での看取りをご希望されるわけではありませんし、またすべてのご家庭が在宅での看取りが可能な環境であるわけでもありません。しかし患者さんご本人やご家族が、少しでも在宅での看取りをご希望されている時は、遠慮なく当院の緩和チームや地域医療連携室にご相談ください。

人の死は敗北ではありません。人に与えられた最期の仕事なのです。できるだけ良い環境で最期の仕事を全うできるよう、緩和チームはお手伝いさせていただきたいと思います。

【呼吸器外科診療部長・緩和ケアチーム　山部　克己】